第６学年　国語科学習指導案

１　単元名　　表現を味わい，豊かに想像しよう　「やまなし」「イーハトーブの夢」

２　指導観

○　本学級の児童の実態

国語の学習に関するアンケート調査からは，次のような結果が見られた。（２９名回答）

「物語の読みの学習は好きですか。」という問いに対し，「とても好き」「好き」と答えた児童が２５名（８６％）「あまり好きではない」「好きではない」と答えた児童が４名（１４％）で，全体的に物語の読みの学習が好きな児童が多いことが分かった。読むことの学習においては，本学級の児童は，これまでに「カレーライス」の学習を通して，登場人物（ひろしとお父さん）の相互関係から二人の人物像や心情をとらえてきている。また，二人の行動や会話，場面の描写から想像をふくらませ，内面にある深い心情についても自分の経験と比べながら読んできている。しかし，自分の考えが作品のどの言葉や文から生まれたものなのかについての根拠をはっきりとできなかったり，作品の言葉や文からの理由付けが飛躍していたりしている児童も少なくなかった。言葉や文を関係付けながら，自分の考えを筋道立てて持つことができる読みにはまだ至っていないというのが現状である。

また「自分が考えたことを発表できますか。」という問いに対しては，「とても好き」「好き」と答えた児童が１５名（５２％）「あまり好きではない」「好きではない」と答えた児童が１４名（４８％）であった。その理由として自分の考えを書きまとめることができなかったり，書いたものが筋道だった考えになっているか自信がなかったりしたためであることがアンケートのコメントから明らかになった。また「書き込みをする時間が十分にありますか。」という問いに対しても「少し足りない」「全然足りない」と答えた児童が１６人（５５％）もいた。これらのアンケートの結果から，一時間の授業の中で「書く活動」を位置付け，その時間の保障をするとともに，何をどのように書くのか内容面，方法面についての具体的な視点作りが大切だということ，そして自分の考えを筋道立てて書きまとめさせるための指導の改善が必要であることがわかった。書く活動については，これまでに「カレーライス」「森へ」の学習を通して，単元の導入段階において，①読みのめあてに対する自分の答えを書く。単元の展開段階において，②一単位時間のめあてに対する自分の考えを書く。③「今日の学習で」（一時間の学習を通してのめあての答え）を書く。単元の終末段階において，④単元の学習を通して感じたことや考えたこと，読みのめあてに対する自分の答えの変容を書きまとめる。という経験をしてきている。しかし，②や③において，児童の書いたと内容は，詳しく言葉や文から理由付けをしながら自分の考えをまとめるという点で個人差がある。これは，教師の書かせ方の明確な観点と手立てに課題があることを示している。

○　本教材の価値

本教材は，宮沢賢治が「五月」と「十二月」の二枚の青い幻灯を谷川の底に住んでいるかにの親子の視点から対比させ，読み手に生き方を問う作品である。「五月」にはありとあらゆるものの命が輝く春のなかの突然の死が描かれ，「十二月」には，すべてが静かな眠りに就く冬の中にある豊かな生が描かれている。全体の構成は，＜前書き＞＜「五月」＞＜「十二月」＞＜後書き＞となっており，「五月」と「十二月」は構成や表現において対比関係を備えている。宮沢賢治が，この二枚の幻灯を通じて伝えたかったことの手がかりは作品の題名，構成，表現の中にあり，児童が作品の表現を味わい豊かに想像できる教材となっている。また優れた叙述も数多くあり，児童がそれらについても自分の考えを書きまとめることができる価値ある教材である。

○　書く活動の充実

六年生の読みの学習における，書く活動の充実とは，象徴性や暗示性の高い表現を選び，その言葉や文を比べたりつないだりして関連付けながら自分の読みとその根拠となった箇所と理由を書き込むことである。また，登場人物の相互関係や心情，考え方や生き方（登場人物＝作者の），優れた叙述についての自分の考えを確かにし，書きまとめることである。

○　論理的思考力を育成するための書く活動

（1）「五月」「十二月」それぞれにおいて，作者が伝えたかったことを谷川の底のかにの親子の視点から論理的に読み確かめるために書く活動を位置付ける。その際「五月」では，
・かにの兄弟のクラムボンについての会話はだれがどの言葉を話しているのか。
・「クラムボン」に象徴される「五月」の不気味さ（「笑ったよ」→「死んだよ」）
・「五月」の動的な表現を通しての内容や要旨
・「五月」の色の表現を通しての内容や要旨
・お父さん，兄，弟の成長の段階の違い
・象徴としてのかわせみの存在
そして，「十二月」では，
・兄と弟の成長について
・「十二月」の音の表現を通しての内容や要旨
・「十二月」の静的な表現を通しての内容や要旨
・「十二月」の匂い表現を通しての内容や要旨
・象徴としてのやまなしの存在
について児童が「五月」「十二月」を対比させながら書くことができるように視点を与える。その際，自分の答え，その根拠となる言葉や文，その言葉や文からの理由付けを書かせ，筋道立てて自分の読みを説明できるようにさせる。
また，後書きからは，
・書き手が読み手に自らの生き方を問うていること
について気付かせ，題名「やまなし」とつないで，この作品で作者が伝えたかったことについて自分の考えを書きまとめさせるようにする。

（2）「五月」「十二月」の場面の読み確かめの終末では，その時間に深まった自分の読みを書かせる時間を位置付ける。その際，黒板に記された一時間の学習の足跡をもとに，自分と友達の読みや根拠，理由付けの違いや重なりを振り返らせるようにする。その手立てを通して，自分の読みの変容を視覚的にとらえやすくする。また，それぞれの場面において，宮沢賢治が伝えたかったことを象徴性や暗示性の高い表現を作品の中の言葉や文と関連付けながら振り返り，書きまとめさせる。さらに，優れた叙述について自分の考えも書きまとめさせる。

○　指導にあたって
　指導にあたっては，次のような支援や手立てを取り入れていく。
　まず，単元名と題名，冒頭（前書き）から，読みのめあてを生み出させるようにする。その際，今までの「カレーライス」や「森へ」の学習を振り返り，題名には何か作者や筆者の特別な気持ちがつまっているものということを確認するようにする。その上で題名の「やまなし」について考えるようにする。「やまなし」というものは，果物の梨のことであり，これが作品の題名になっていることから，何か「やまなし」には，作者の伝えたい特別な意味が隠されているのではないか，と推測させるようにする。また，冒頭（前書き）から作者がわざわざ前書きを書いた意味を推測させるとともに，その働きについても目を向けさせていくようにする。そして単元名と題名，冒頭（前書き）で読み取ったことをつないで，読みのめあてを生み出させるようにする。
　次に，読みのめあてに沿って全文を読ませ，読みのめあての答えを書かせるようにする。児童が論理的に自分の作品に対する読みをつくることができるように，学習プリントには，①自分の答え②答えをつくる手がかりにした言葉や文（根拠）③ 答えをつくる手がかりにした言葉や文から考えたこと（理由付け）を書く欄を準備するようにする。このことは，児童が直感やイメージだけでなく，作品の言葉や文を関係付けながら筋道を立てて自分の読みをつくることができるようにすることをねらっている。自分の読みをつくったら，クラスで自分の読みを交流させ，自分と友達の読みの重なりや違いについて話し合いをさせ，今後の読み確かめのための視点を明らかにし学習計画を立てる。その際，児童がつくった読みには，その根拠となる言葉や文，またそこから考えた理由付け，根拠となる言葉や文のたどり結び方に違いがあることをとらえさせておくようにする。
　読み確かめでは，学習計画の視点をもとに，「五月」と「十二月」を比較しながら読み確かめをし

ていく。その際にも，自分の読みを筋道立てて論理的に説明することができるように，①自分の答え②答えをつくる手がかりにした言葉や文（根拠）③ 答えをつくる手がかりにした言葉や文から考えたこと（理由付け）を書くことができる学習プリントを準備する。【書く活動①】また，読み確かめの終末では，一時間の学習を通して深まった自分の読みやその読みがどのような読み方をした結果得られたものなのかについて書きまとめさせるようにし，自分の考えの変容に気づかせたり，文学的な文章の読み方の技能を確かにさせたりする。【書く活動②】

最後に，読み確かめで読み取ってきたことと題名「やまなし」をつないで，宮沢賢治が伝えたかったことや，宮沢賢治の生き方について推論し，宮沢賢治という人物への興味を高めさせ，資料「イーハトーブの夢」につないでいくようにする。また，読み方のまとめでは，宮沢賢治が読み手に自分の考えを伝えるために文章構成や表現を工夫していたことを振り返ると共に，それらを読み確かめるときに自分たちがどのような技能を用いたのか整理し，今後の学習でも生かすようにしていく。

また，資料「イーハトーブの夢」で分かった宮沢賢治の考え方や生き方をもとに再度「やまなし」を読ませ，宮沢賢治の考え方や生き方が表れているところを再確認させる。その上でこの単元全体を通じて感じたことや考えたこと，宮沢賢治の考え方や生き方に対する自分の考えを書きまとめさせるようにする。

３　単元目標

○　文章構成の意図を考えながら作品を読み，二枚の青い幻灯で作者が伝えたかったことを推論することができる。

○　文章構成の工夫を読む読み方や比喩表現，情景，題名の働きを読む読み方を身に付け，それらの表現の素晴らしさについて自分の考えを書きまとめることができる。

○　「輝きのある日常の中にある冷酷な死」や「ひっそりと静まりかえった生活のなかにある豊穣な生」について，また「奪う命」「与える命」について自分のものの見方や考え方を深めたり広げたりすることができる。

○　「やまなし」「イーハトーブの夢」を通して宮沢賢治の考え方や生き方について考え，自分の考えを書きまとめることができる。

４　単元計画　全１２時間　（「やまなし」９時間，「イーハトーブの夢」３時間）

過程	時	主な学習活動と内容	指導上の留意点
読みのめあて	1	１　単元名から学習の構えをもつ。 ２　今までに学習した作品の題名の働きについて振り返る。 ３　「やまなし」という題名から考えたことや疑問を出し合う。 ４　冒頭（前書き）を読み，単元名，題名とつないで読みのめあてを生み出す。	○　今までの「カレーライス」や「森へ」の学習を振り返り，題名には何か作者や筆者の特別な気持ちがつまっているものということを確認する。 ○　冒頭（前書き）から作者がわざわざ前書きを書いた意味やその働きについて推測させるようにする。
		［読みのめあて］ 小さな谷川の底を写した二枚の青い幻灯で，宮沢賢治さんは何を伝えたいのだろう。 （題名「やまなし」にはどんな意味がこめられているのだろう。）	
読みのめあての	2	１　読みのめあてを確認する。 ２　全文を音読し，難語句の意味を確認する。 ３　文章構成とあらすじをとらえる。 ４　読みのめあての答えを書きまとめる。 **単元導入における【書く活動】**	○　二枚の幻灯が前書きと後書きにはさまれていることを確認する。 ○　論理的に自分の作品に対する読みをつくることができるように，学習プリントには，①自分の答え②答えをつくる手がかりにした言葉や文（根拠）③　答えをつくる手が

答え			かりにした言葉や文から考えたこと（理由付け）を書く欄を準備する。
		［読みのめあての答えの方向］ 静かな生活の中にある生きる喜びを伝えたかった。	
学習計画	3	1　自分の読みのめあての答えを出し合う。 2　読みのめあての答えの重なりや違いを整理する。 3　読み確かめの視点を整理し，学習計画を立てる。	○　自分と友達の考えの重なりや違いについて話し合いをさせる。 ○　読みの違いや重なりは根拠となる言葉や文，またそこから考えた理由付け，根拠となる言葉や文のたどり結び方に違いがあることをとらえさせるようにする。 ○　整理した視点を，どのように読み確かめていけばよいか今後の見通しをもたせるようにする。
		［学習計画］ ①「五月」と「十二月」は，かにの親子にとってどんな世界か （「かにの親子の視点」から考える） ②「かわせみ」と「やまなし」に，宮沢賢治さんはどんな意味を込めたのか （「かにの親子の視点」と「自分が生きている社会的な視点」の両方から考える） ③宮沢賢治さんが，「やまなし」の作品で伝えたかったことは（題名の意味は） （「自分が生きている社会的な視点」から考える）	
読み確かめ①	4 5	「五月」と「十二月」はかにの親子にとってどんな世界なのか読み確かめよう。	
		1　情景が分かる言葉や文を探す。(根拠) 2　選んだ言葉や文から考えたことを書いたり（理由付け）たどり結んだりする（関連付け） 3　「五月」と「十二月」の情景について自分の読みを書きまとめる（答え） **【書く活動①】**	○「五月」と「十二月」の情景は，かににとってどんな世界なのか自分の読みをまとめることを確認する。 ○　自分の読みを説明するための根拠とした言葉や文，それらへの理由付けをしていくことを意識させる。
		4　考えを交流する。	○　自分と友達の考えの違いは言葉や文の選び方，関係づけの仕方の違い，言葉や文への解釈の違いということをとらえさせる。
		5　深まった読みや自分の読みの変容，またそれらがどのような読み方の技能を使ったら得られたものなのかについて書きまとめる。 **【書く活動②】**	○　友達の読みを聞いて深まった自分の読みやそれらがどのような読み方の技能を使ったら得られたものなのかについて書きまとめさせる。
		「五月」 ・動きと色のある世界　　（昼） ・上からきたもの…「かわせみ」	「十二月」 ・静けさのなかの音と匂いの世界　（夜） ・上からきたもの…「やまなし」
		「かわせみ」と「やまなし」に 宮沢賢治さんはどんな意味を込めたのか読み確かめよう。	
		1　前時学習を振り返る。	○　前時で学習した「五月」の情景と「かわ

読み確かめ②	6 7 本時	2「かわせみ」「やまなし」につながる言葉や文を探す。(根拠) 3　選んだ言葉や文から考えたことを書いたり（理由付け）たどり結んだりする（関連付け） 4　「かわせみ」と「やまなし」について自分の考えを書きまとめる（答え） 【書く活動①】 5　考えを交流する。 6　深まった読みや自分の読みの変容，またそれらがどのような読み方の技能を使ったら得られたものなのかについて書きまとめる。 【書く活動②】	せみ」，「十二月」の情景と「やまなし」をつないで考えさせるようにする。 ○　「かわせみ」も「やまなし」も上（外界）からきたものという設定になっており，「五月」と「十二月」が対比的に書かれていることに目を向けさせ，これらがかにの親子に何をもたらしたのか考えさせるようにする。 ○　小グループでの話し合いを取り入れ，自分の考えを広げたり深めたりするようにする。 ○　友達の読みを聞いて深まった自分の読みやそれらがどのような読み方の技能を使ったら得られたものなのかについて書きまとめさせる。
		「かわせみ」 ・明るい世界の中の突然の恐怖（死をもたらすもの） ・自分が生きるために命を奪うもの	「やまなし」 ・静かで暗い世界の中の喜び（生をもたらすもの） ・自分の命を失うことによって他に命を与えるもの
読み確かめ③	8	宮沢賢治さんが「やまなし」の作品で伝えたかったことを考えよう。 （題名「やまなし」にこめられた意味について考えよう。） 1　前時までの学習を振り返る。 2　なぜ題名が「やまなし」なのか自分の読みを書きまとめる（答え） 【書く活動①】 3　考えを交流する。 4　深まった読みや自分の読みの変容，またそれらがどのような読み方の技能を使ったら得られたものなのかについて書きまとめる。 【書く活動②】	○　今まで読み確かめてきたことを振り返る。 ○　「五月」では「かわせみに象徴された世界」，「十二月」では「やまなしに象徴された世界」がえがかれていることを確認し，なぜ宮沢賢治が「かわせみとやまなし」にしなかったのか今まで読み深めてきたことをもとに推論させるようにする。 ○　全体で交流した内容を題名とつないで考えさせ，題名の働きについてとらえさせるようにする。 ○　友達の読みを聞いて深まった自分の読みやそれらがどのような読み方の技能を使ったら得られたものなのかについて書きまとめさせる。
		人生は「五月」と「十二月」のような世界で成り立っている。他の命を奪いながら生きていかなければならないことは残酷なことかもしれないが仕方のないことであるかもしれない。またどんなに静かでひっそりとした生活の中にも生きる喜びがあり，他の人に喜びや幸せを与えるやまなしのような（生を与える）生き方があることも知ってほしい。この「やまなし」の話を通して自分の考え方や生き方を見つめていってほしい。自分がどんな生き方をしていくかは，人が決めることではないからだ。しかし	

		題名が「やまなし」となっていることからも，宮沢賢治さん自身は，「やまなし」のような生き方をしたいと考えていたのではないかということがうかがえる。	
読み方のまとめ	9	「やまなし」における宮沢賢治さんの表現のすばらしさを味わおう。 1　単元のはじめから前時までの学習を振り返る。 2　自分が好きな表現について話し合い，それがどんな働きをしていたのか整理する。 ・情景描写を読む ・比喩表現を読む ・文章構成を読む ・題名を読む 3　宮沢賢治の優れた表現について自分の考えを書きまとめる。	○　宮沢賢治が読み手に自分の考えを伝えるために文章構成や題名の付け方，表現を工夫していたことをとらえさせるようにする。 ○　宮沢賢治の様々な作品を紹介し，宮沢賢治の世界への興味を広げさせるようにする。
		宮沢賢治さんは自分の考えを伝えるために文章構成や題名の付け方を工夫していた。また，「五月」「十二月」では読み手が想像をふくらませたくなるような比喩表現や情景描写がされていた。また宮沢賢治さん独特のユーモアのある表現（「クラムボン」や「イサド」など）もついついその意味を考えてしまい，作品の世界のなかにひたることができる表現であったし，そんな宮沢賢治さんの表現がとても素敵だなと思った。宮沢賢治さんの別の作品もぜひ読んでみたくなった。	
読みのまとめ	10 11	資料「イーハトーブの夢」を読み，「やまなし」に表れている宮沢賢治の考え方や生き方を探ろう。 1　資料「イーハトーブの夢」を読む。 2　宮沢賢治の「生や死への考え方」「生き甲斐・喜びについての考え方」について話し合う。 3　資料で読み確かめた視点で「やまなし」を読み直し，宮沢賢治の生き方・考え方が表れているところを再確認する。	○　宮沢賢治の一生を整理して書きまとめ，そこから推論できる賢治の生き方や考え方について書かせるようにする。 ○　再度，「やまなし」を読ませ，賢治の生き方や考え方が強く表れているところを交流させる。
	12	単元の学習を通して感じたことや考えたこと，宮沢賢治の生き方や考え方に対する自分の考えを書きまとめる。**単元終末における【書く活動】**	○　宮沢賢治の資料と「やまなし」から宮沢賢治がもっている「生や死への考え方」「生き甲斐・喜びについての考え方」について振り返らせ，今までの自分の経験や今の自分の生活，これからの自分とつないで考えを書かせるようにする。

5　本時　　平成２１年９月２９日（火）

6　本時の目標　（７／１２）

○　文章構成の意図を考えながら作品を読み，宮沢賢治が「かわせみ」と「やまなし」にどんな意味をこめたのか考えることができる。

○　場面と場面を比べる読み方，言葉と言葉をつなぐ読み方を身に付けることができる。

7　本時指導の考え方

これまでに，子ども達は，読みのめあての答えを読み確かめるために，①「五月」と「十二月」はかにの親子にとってどんな世界なのかについて自分の読みをつくり交流をしてきている。その際，作品の中から根拠となる言葉や文を選び，それらを関連付け，自分の読みを生み出す読み方を経験している。

本時は，学習計画の段階で生み出された二つ目の視点②宮沢賢治さんは「かわせみ」と「やまなし」にどんな意味を込めたのかについて読み確かめる時間である。

前時に子ども達は「かわせみ」,「やまなし」が何を意味しているのかにつながる言葉や文（根拠）探し，そこから分かったこと（理由付け）を書いている。そしてそれらの言葉や文をつないで「かわせみ」,「やまなし」に込められた人間社会における意味について自分の読み（答え）をまとめている。

本時の導入にあたっては，前時までの学習を振り返り，「五月」「十二月」はかにの親子にとってそれぞれどんな世界だったのかを確認する。そして「五月」が「明るいけれど暗く怖い世界」,「十二月」が「暗く静かだけど豊かな世界」と言えるのはなぜか考えさせ,「五月」「十二月」のそれぞれ象徴的な存在である「かわせみ」と「やまなし」というキーワードに目を向けさせていく。その上で「かわせみ」と「やまなし」はかにの親子にとってどんな存在だったのかについては前時までに学習したことを確認する。本時はかにの親子の視点だけでなく，作者宮沢賢治さんがかにの親子の視点を通して人間社会の何を「かわせみ」と「やまなし」に込めたのかについて考える時間であることを明確にする。

本時の展開にあたっては，前時につくった自分の読み【書く活動①】を交流させていく。その際，自分の読みをつくるまでに手がかりとした言葉や文（根拠），そこから分かったこと（理由付け），自分の読み（答え）を筋道立てて説明させ，お互いの読みの重なりや違いに目を向けさせるようにし，自分の読みを付加・修正させていく。読みの交流をしていく中で,「かわせみ」は「明るい世界の中の突然の恐怖（死をもたらすもの)」「自分が生きていくために命を奪うもの」で「やまなし」は「静かで暗い世界の中の喜び（生をもたらすもの)」「自分の命を失うことによって他に命を与えるもの」という読みに方向付けていく。「やまなし」が「自分の命を失うことによって他に命を与えるもの」という読みに至らない場合には,「やまなし」が熟して落ちるというのはどういうことを意味しているのか，また落ちた「やまなし」はかにの親子に何をもたらしたのかについて考えさせるようにする。

本時の終末では，宮沢賢治さんが「かわせみ」,「やまなし」にどんな意味を込めたのか自分の読みの変容や自分の深まった読み，またそれらがどのような読み方をした結果得られたものなのかについて書きまとめさせる。【書く活動②】

○　論理的思考力を育成するための書く活動

（１）宮沢賢治が「かわせみ」,「やまなし」に込めた意味について自分の読み，その根拠，理由を書く。

（２）宮沢賢治が「かわせみ」,「やまなし」に込めた意味について，友達の読みを聞いて変容した自分の読みや自分の深まった読み，またそれらがどのような読み方をした結果得られたものなのかについて書きまとめる。

検証の視点 ○　宮沢賢治が「かわせみ」,「やまなし」に込めた意味について自分の読みをつくるのに，【書く活動①】【書く活動②】の位置づけとその内容・方法は有効であったか。

8　本時の展開

学習活動と内容	指導上の留意点
1　本時学習のめあてを確かめる。 ○　学習計画の段階で生み出された視点①「五月」「十二月」はかにの親子にとって　それぞれどんな世界だったのかと本時学習の読み確かめの視点②「かわせみ」と「やまなし」に宮沢賢治さんはどんな意味を込めたのかの違いを明確にする。 〈学習のめあて〉	○　読み確かめの①では「かにの親子の視点」で読んできたことを振り返るとともに，本時の読み確かめ②では，人間社会の視点から考えることが必要であることをとらえさせる。
「かわせみ」と「やまなし」に宮沢賢治さんはどんな意味を込めたのか読み確かめよう。	
2　前時までの学習を振り返る。 ○　「五月」,「十二月」がかにの親子にとってどんな世界だったのか確認する。	○　学習の足跡をもとに，かにの親子にとっての「五月」と「十二月」の世界が対比的に書かれてあったことを確認し,「五月」と「十二月」の象徴的な存在である「かわせみ」と「やまなし」に宮沢賢治がどんな意味を込めたのか疑問をふくらませる。
3　自分の読みを交流する。 ○　宮沢賢治が「かわせみ」,「やまなし」にどんな意味を込めたのかについての自分の読み ○　読みをつくるのに手がかりとした言葉や文（根拠） ○　選んだ言葉や文から分かったこと（理由付け・関連付け） 「かわせみ」 ・明るい世界の中の突然の恐怖（死をもたらすもの） ・自分が生きていくために命を奪うもの ---------- 「やまなし」 ・静かで暗い世界の中の喜び（生をもたらすもの） ・自分の命を失うことによって他に命を与えるもの	○　子ども達の発表を「かにの親子の会話」「情景」（色・形・明るさ・音・匂い・味・さわった感じ）で整理・分類しながら「かわせみ」「やまなし」につないでいく。 ○　「やまなし」が「自分の命を失うことによって他に命を与えるもの」という読みに至らない場合には,「やまなし」が熟して落ちるというのはどういうことを意味しているのか，また落ちた「やまなし」はかにの親子に何をもたらしたのかについて考えさせるようにする。
4　自分の読みの変容や自分の深まった読み，またそれらがどのような読み方をした結果得られたものなのかについて書きまとめる。 【書く活動②】	○　「今日の学習で」【書く活動②】で書きまとめるための視点を以下の３つ与えるようにする。 ・　自分の読みの変容 ・　自分の深まった読み ・　どのような読み方が身に付いたか
始めは「かわせみ」はただ恐ろしいもの,「やまなし」は楽しいもの，嬉しいものとしか思っていなかったけれど，○○さんや□□さんの発表を聴いて,「かわせみ」がこの世の中でいうと明るい世界の中の突然の恐怖のことを表せていることや,「やまなし」が自分の命を与えていること，喜び・平和・豊かさなどの理想の世界の象徴であることが分かりました。また「かわせみ」と「やまなし」はすべてにおいて反対の存在になっているなあと気付きました。それは，場面と場面を比べて読んだり，言葉と言葉をつないで読んだりしたからです。今日の学習を通して，読みのめあての「題名『やまなし』にはどんな意味がこめられているのだろう。」の答えが少し分かってきました。	